

コロナ禍の中で映像配信を通じたコンサートの可能性を探るという意味で興味深く感じると同時に、ワークショップ主催者が試行錯誤されて工夫と苦勞を重ねている様子も伝わってきた。演奏そのものもレベルが非常に高く素晴らしいものであった。いくつか気づいた点に関して列記する。

ワークショップには少なからず、演奏の聞き方や見方をより豊かにするという方向付けの役割がある。したがって、これまで演奏の中でもフォーカスしなかったような部分に



気付くことができるという意味では有意義なものと思われる。一方でオンラインに限らずではあるが、その方向づけが逆に鑑賞者の想像力を制限することにもつながるため、ワークショップ時のファシリテーションの構造や目標設定に工夫が必要かもしれない。

例えば、楽曲の背景を理解するという意味においては、途中でオスマントルコの話がされていたように、その楽曲が作られた時代背景などの解説があれば、より世界観の広がりを感じられる。さらに作曲家周りの人間模様、楽曲を依頼したパトロン、その当時の時代背景などの情報によって楽曲に対する想像力がより膨らむのではないか

もう一つの可能性としては、音楽家による音楽の解説ではなく少し違った領域と組みあわせることで、より多角的な理解を促す方向である。例えばその楽器の作り方について職人が語ったり、植物学者が楽器に適した木材やそれが取れる森林について語る、あるいは物理学者が音波の観点から楽曲を語るなど、オンライン演奏自体をプラットフォームにして別領域から照射するような試みがあってもよいと思われる。

あるいは音楽ということを入り口にしてより抽象的で普遍的なことを理解していくためには、答えを提示するよりも、問いかけのような形で導いていく方法が有効かもしれない。例えば、「演奏者がどのようにしてタイミングを合わせているのか」という問いかけは、人が誰かと言語によらないコミュニケーションをする際に、どのような方法を用いているのかということを思索するきっかけとなりうる。あるいは一つの楽器を奏でるだけでは出せないようなハーモニーがアンサンブルで表現できることから、一人一人の個が協力し合うことで生まれる全体での創発性は、単なる個の総和ではないことを学ぶ入り口になるかもしれない。こうした学びはファシリテーターの能力や技術や目指すべき学習の抽象度などに応じて様々な設定が可能である。

また、今後こうしたオンラインコンサートが増えていくことが予想されるが、その際にライブコンサートとは違う可能性を模索せねばならないことを強く感じた。特に映像の撮り方がポイントになるのは複数台のカメラ

で追いかけ、より見て欲しいところにクローズアップすることが可能になる。その反面、生のコンサート会場では演奏者のどこに注目するのは観客の目に委ねられているため、映像配信の際には観客の見る自由が制限されてしまう可能性もある。なので映像配信ならではの手法を今後考えねばならないだろう。

その際に、模索する方向性の一つとして、そのコンサートが行われるリアルタイムの時間以外の映像をどのように活用するかがポイントとなるように思われる。配信は全て映像で構成されたため、事前の映像を編集して配信することもできる。その中に例えば練習風景でのディスカッションをしっかりと見せたり、リハーサル風景でどんなことを注意しているのか、また演奏者の日常はどのようなものなのか、などのプロセスと劇場の外の広がりを見せることで、より深くその音楽や演奏者について理解することができるのではないかと。完成形として提示するだけでなく、それが育っていく様子を取り込むことも考えられる。

その観点から考えれば演奏者の魅力を伝えることも重要な課題かもしれない。音や音楽のことをわかりやすく説明することも良いが、特に音楽に関心のない中学生や高校生がこうしたオンライン演奏を聴く際に入り口となるのは演奏者のキャラクターであったりする。その演奏者がどうやって音楽と出会って、なぜその楽器を選んだのか、どういう楽曲や演奏を愛しているのか、何に惹かれてこの世界に入ったのかについて知るなど、その人間の情熱を通じて関心を持つことがある。編集された映像だからこそ伝えることのできる演奏者の内面に迫ることも今後の検討である。

またその視点はまちづくりの観点ともつながる。今配信されているホールがどういう町にあって、その町の人々にとってどのような存在であるのか。そこにどんな人が住んでいて、音楽とどのように向き合っているのか。演奏者はその町とどのような関わりがあるのか。そうした人と施設と町の背景と合わせて配信されることで、その音が流れている町のことを理解してもらえ、機会が開ける可能性がある。

こうしたオンライン演奏会では、ライブコンサートとの違いがあるほど両方の意味が出てくると考えられる。オンライン演奏会では実際のライブコンサートでは見えないものが配信されるほど、逆にライブコンサートに出向いた時に実際にその空間に身を置いて全身で生演奏を聴くことのも価値も増していく。

リアルタイムアンケートについては、今後の活用の可能性はもう少し幅広く模索できそうに思える。匿名のアンケートということもあり、大勢の人前で発言しにくいようなシャイな日本人にとっては答えやすい反面参加者同士のコミュニケーションについては難しくなるかもしれない。

意見の収集や集計をリアルタイムに観る面でも利便性があるが、一方で後ほど時間をとってじっくりと反芻するアンケートと違って内省する時間が取れない分、反射的な意見になりがちなのではないか。「どんなことを気にして演奏を聞いていたか」という質問が何度かあったが、馴染みのない人にはなかなかパッと答えにくいと考えられる。また感じていても言語化できないようなことがあるため、少し時間を置いてじっくりと内面を探りながら言葉にしていくような時間があっても良いのではないかと。また全体的な音の体験や言語化がなかなかできないところに芸術の特性があるように思えるので、それを掘り下げていくことを促すような時間があってもよいかもしれない。演奏自体が力を持っているため、それをじっくりと無言無心で堪能できるような

時間も組み合わせると効果的なように思えた。

最後に、実際のコンサートでは演奏者が観客のエネルギーから影響を受けて演奏の質が変わることが少なからずあると思うが、今後オンライン演奏会では観客と演奏者が一緒に空気をつくる可能性についてどういう方法があるのかは興味深い。ひょっとするとライブとは全く違う可能性がありうるかもしれないため、それについては今後の模索を期待したい。